

特集 地域特産作物

Ⅲ ハーブ【産地の取組】

ハーブの普及・振興のために —歴史と現状、必要な情報、全国ハーブサミットの役割—

NPO 法人ジャパンハーブソサエティー 専務理事 木村 正典

はじめに

ハーブは、人類の歴史とともに歩み、薬用、防腐、食品保存、食欲増進、宗教儀式、呪術、クラフトなどでわれわれの生活に潤いを与え、命を繋いできた重要な植物たちです。

ハーブとは、香りや辛み、薬効、色素などの何らかの特殊な成分を持っている特徴があり、その有効成分を目的として、暮らしの中で利用してきた植物と言えます(木村, 2013)。カンキツ類は皮をむいて果肉を食べれば果物ですが、果皮や絞り汁を、香りや薬効、酸味などのために、料理や飲み物、クラフトなど、暮らしの中で利用すればハーブになります。モモも果実は果物ですが、葉は保湿効果の高いハーブです。キャベツも不断は野菜として利用しますが、健胃のためにティーで飲めばハーブと言えるでしょう。

我が国には古くから、ショウガやミョウガ、ミョウガタケ、切りミツバ、根ミツバ、オオバ、赤シソ、メジソ、メタデ、ワサビ、カラシナ、ハマボウフウ、ウド、キノメ、芽ネギ、アサツキ、ギョウジャニンニク、ゴーヤー、フキ、フキノトウ、アシタバ、カイワレダイコン、ハッカ、ニッキ、ユズ、カボス、スダチ、ウメ、チャ、ソバ、ゴマ、キハダ、アカネ、アイタデ、ベニバナ、ウコン、ショウブ、クマザサ、トウキ、ハトムギ、ミシマサイコ、ヨモギ、アマチャ、カリン、ザクロ、クロモジ、クワ、ナツメ、ヒノキ、ヤマザクラなど、香りや辛み、酸味、薬効、色素などの特殊な成分を利用するハーブが栽培・利用されてきました。

1. ハーブの普及の歴史と現状

ハーブは、果樹や野菜、花などの園芸植物同様、かつては各家庭で自給自足的に維持・利用されてきましたが、産業革命以降、保存、加工、流通な

どの技術革新や工業化に伴って、家庭の庭先から徐々に姿を消し、専門に生産する農家とその遺伝資源保全の担い手となってきました。

現在の西洋ハーブは、明治維新の文明開化で、ほとんどが導入されました。しかし、食文化の違いから普及せず、唯一、カールドパセリが洋食文化の中で定着してきました。

現在のように普及・定着するのは、1980年代に入ってからで、この頃から大きなハーブブームが巻き起こります。このブームは日本固有のものではなく、世界的なムーブメントでした。

世界的なハーブブームのきっかけの一つはアメリカ西海岸における1960年代のヒッピーの運動です。彼らは、反社会、自然回帰をかね、後世にさまざまな影響を及ぼしました。その中で、エコ、オーガニック、ハーブ、自然療法など、かつて人間が歩んできた原点を見つめ直すムーブメントがおこり、ハーブが再評価されます。公害、環境汚染がクローズアップされはじめた時期でした。この時に起こったハーブブームはヨーロッパへ飛び火し、がやがて1980年代に日本に上陸します。日本はバブル期にさしかかる頃で、海外旅行で本場ヨーロッパや東南アジアなどのハーブを食して帰国した人たちが日本のレストランでもそれを求めるようになります。一流レストランで、カールドパセリやシソというわけにはいかず、イタリアンパセリやバジルが求められたわけです。当時、西洋ハーブはドライも用いられていましたが、フレッシュなものが空輸されていました。

この頃から国内での生産も始まり、奇しくも養液栽培(水耕栽培)ブームと相まって、水耕栽培でハーブを生産する農家があらわれ、レストランやホテルとの契約栽培も行われました。

やがてバブルが崩壊し、レストランに行く人が

減少してくると、レストランでハーブを楽しんでいた人たちから、自宅でハーブ料理を作りたい、そのためにハーブを買いたいという需要が高まり、フレッシュハーブがスーパーの店頭に並ぶようになります。都心の高級スーパーでしか手に入らなかったフレッシュハーブが、近所のスーパーで購入できるようになるわけです。さらにハーブが普及すると、今度は育てて利用したい人が増え、種苗がネットやホームセンターなどで購入できるようになって現在に至っています。

西洋ハーブは、バブル期に空輸していた時代から、レストラン向けに国内生産していた時代、市場流通してスーパーで買える時代を経て、現在はハーブ本来の、育てて利用する時代にまで普及したと言ってもいいでしょう。収穫物が市場流通で定着すると同時に、苗の生産販売が普及、定着してきました。

2. ハーブの普及・振興に必要な情報

ーミントの例ー

ハーブは歴史が古く、特に西洋ハーブはそれぞれに物語があるため、普及や振興、販売戦略には、利用方法はもとより、その歴史的背景や文化を知ることが大切になります。

また、ハーブは古くから世界各地で個別に普及してきたこともあって、交雑しやすい種類では種分化とも言える品種分化が進んでいて、名称はもとより、植物分類学的な位置づけの曖昧なものが多くあります。名称、植物学的な分類は同じでも、香り成分の異なる、いわゆるケモタイプも多く存在し、どう扱っていくかも課題です。加えて、ハーブブーム以降の園芸品種の作出によって、さらに品種が多様化しています。ミント類はその最たるものといっても良いでしょう。一口にペパーミントと言っても、形態の大きく異なるものがいくつも存在します。また、種苗を生産・販売する場合、ハーブでは学名の記載が商品の信頼度を大きく左右することになります。ここでは、ミント類（メンタ属植物）の分類上の問題点を整理し、最新の学名をまとめました。

(1) ミントの人との関わりの歴史

ミント (Mint) は シソ科 (Lamiaceae

(Labiatae)) メンタ属 (*Mentha*) の総称です。キャットミントはミントの名がついていますが、キャットニップの仲間、ネペタ属 (*Nepeta*) 植物でミントではありません。

Mint および *Mentha* の語源は、ギリシャ語の *Menthe* (メンテー) または *Mintha* (ミンター) とされ、これはギリシャ神話に出てくるニュムペー (ニンフ) の名前です。メンテーの物語には諸説あり、一般的には、冥府の神ハーデースがメンテーの美しさに惹かれたところを妻のペルセポネーに気づかれ、その嫉妬で踏みつけられて呪いで草にさせられミントになったとされています。以来、ミントは神殿の庭で芳香を放って自分の存在を知らせているとか、あわれんだハーデースによって芳香を放つようになったとされています。また、ハーデースに目をつけられてさらわれそうになったところを、ペルセポネーが香りのよい草に変えて隠してあげたとも言われています (ジャパンハーブソサエティー学術委員会, 2015)。

ミントは、古代エジプトから、食用や薬用、ミイラの防腐などに用いられてきた、人との関わりの最も古いハーブの一つです。欧州では修道院で消化促進にリキュールが作られたほか、入浴剤やシャンプー、歯磨き、ストローイングハーブ (床に敷いて踏むことで香りを出し、消臭、抗菌、防虫などに利用) などにも使われてきました。欧州以外でも、インドでは食用や薬用、歯磨きに、中国では中薬に古くから用いられてきました。中薬では *M. canadensis* L. を薄荷 (ハッカ) と呼び、ほかにも蕃荷葉 (バンカサイ)、南薄荷 (ナンハッカ)、猫兒薄荷 (ビョウジハッカ)、昇陽葉 (ソウヨウサイ)、萼荷 (バカ)、夜息荷 (ヤソクカ) などの異名があります (上海科学技術出版社・小学館, 1985)。

我が国には中国から渡来したと言われており、これはニホンハッカ (*M. canadensis* L.) と考えられます。ミントの和名である薄荷 (ハッカ) は、中国名に由来し、古くは目草 (メグサ) とも言います。目草は葉を揉んで疲れ目に当てたのが由来とされます。平安時代に「薄荷」の記述がみられますが、これが日本在来のヒメハッカ (*M. japonica* (Miq.) Makino) を指すのか、中国から渡来

したニホンハッカを指すのか、あるいは日本にも在来のニホンハッカがあったのかについては定かではありません。

江戸時代以降に、岡山を中心にニホンハッカが本格的に栽培されるようになり、山形を経て明治後期には北海道に導入されます。これらの産地にはニホンハッカが野生化しており、中には在来のヒメハッカとの自然交雑種と思われるものも見つっています（梅本，2000）。

昭和に入ってから、ニホンハッカを親として、メントール含量を65%以上含むような高メントール系の品種が作出され、「和種薄荷」と呼ばれるようになりました。中にはニホンハッカとペパーミントとの種間雑種もあります。

メントールの結晶である薄荷脳と、精油である薄荷油の生産は、戦前に世界の8割をも占め、輸出大国となって、Washuhakkaの名は世界にとどろきました。しかし戦後、合成メントールの普及と輸入自由化、関税引き下げの影響で国内生産は急激に衰退しました。

現在、ガムなどの菓子類やタバコ、歯磨き粉、シャンプーなどの香料原料としての商業的精油生産は、ペパーミント、スベアミントともにアメリカが一大産地で、インドや中国でも盛んに栽培されています。

（2）ミントの分類

メンタ属の生物分類はリンネの『Species Plantarum』（1753）で本格化して以降、Bentham（1848）をはじめとして多くの試みがなされてきましたが、容易に交雑することから分類が極めて困難であり、これまで3000もの名前が付けられたものの、その99%が同一植物に付けられたシノニム（異名）もしくは無効名で、今も混乱が続いています。

英国キュー王立植物園と米国ミズーリ植物園が合同で作成した植物分類データベースで、現在、植物分類における世界基準的な役割を果たしている『The Plant List』には、メンタ属にはシノニムや無効名をあわせると1105の種が、亜種や変種などをあわせると2524の学名が記載されているものの、そのほとんどがシノニムであり、現在、正式に認めているのは、15の交雑種を含む42種と7亜

種、7変種の計56の学名です。表1に『The Plant List』で認められている56の学名すべてと品種を掲載しました。

近年のモヒートブームで、イエルバブエナ（*Mentha nemorosa* Willd.）などの苗も販売されるようになりましたが、今後も次々と新しい種類が導入されることでしょう。信頼できる情報と照らし合わせて学名を確認する必要があります。

3. ハーブの普及と地域振興 —全国ハーブサミットの役割—

ハーブの普及と地域振興を推進する全国組織に、全国ハーブサミット連絡協議会があります。この連絡協議会はハーブでまちづくりをしている自治体を中心に構成され、毎年、自治体持ち回りで全国ハーブサミットを開催して地域振興に貢献しています。開催のきっかけは当時の河口湖町の小佐野町長からNPO法人ジャパンハーブソサエティーに「全国の自治体でハーブを切り口として町おこしをしているところと一緒にハーブサミットを開催し、情報交換する仕組みを作りたい」と相談があったことで、全国のハーブガーデンなどのある自治体に直接交渉して実現することになりました（坂出，2008）。それ以来、NPO法人ジャパンハーブソサエティーではサポートを続けています。全国ハーブサミットは、1992年に山梨県河口湖町で第1回大会が開催されて以来、ほぼ毎年開催され、2016年には愛媛県久万高原町で第23回大会が開催されます（表2）。

ハーブサミットは、ハーブブームの影響で全国各地にあったハーブガーデンやハーブ農園を核として、観光化を中心とした地域振興が図られたり、ガーデニングブームと相まって公園やオープンガーデンなど、ハーブを核とした美しいまちづくりに力点が置かれて開催されてきました。農業と観光との結びつきから、第6回の上富良野町大会や、第2回と第20回の小豆島大会では、それぞれラベンダーやオリーブなどの特産品振興にも大きく貢献したほか、第15回の北見市大会では、薄荷を再評価する大きなチャンスとなりました。

近年は、産業振興の観点から、ハーブの生産振興や6次産業化を目指して開催される大会が主流

表1. *Mentha* 属 全42種、7亜種、7変種 (学名、種名カタカナ表記、一般名と異名、(交雑種の親)、cultivar [品種])

species 種	subspecies 亜種	variety 変種
<i>Mentha alba</i>	Boriss.	アライカ
<i>Mentha alopocuroides</i>	Hull	アロペクロイデス
<i>Mentha aquatica</i>	L.	アクアティカ ウォーターミント、ヌマハッカ(沼薄荷)、ミズハッカ(水薄荷)、creeping mint, marsh mint, wild mint
<i>Mentha arvensis</i>	L.	アルウェンシス コーンミント、ヨウシュハッカ(洋種薄荷)、field mint, brook mint, tule mint, wild mint, common mint, [品種] ‘クールミント’、‘バナナミント’、‘Damroo’、‘Himalaya’
<i>Mentha atrolilacina</i>	B.J.Conn & D.J.Duval	アトウロリラキーナ
<i>Mentha australis</i>	R.Br.	アウストウリス オーストラリアンミント、river mint, native mint, native peppermint
<i>Mentha canadensis</i>	L.	カナデンシス ニホンハッカ(日本薄荷)、ワシユハッカ(和種薄荷)、ハッカ(薄荷)、Hakka, Japanese mint, American cornmint, Canadian mint, [品種] ‘あかまる(赤圓)’、‘りょくび(緑美)’、‘はくび(博美)’、‘ほくしん(北進)’、‘さんび(三美)’、‘まんよう(萬葉)’、‘すずかぜ(涼風)’、‘おおば(大葉)’
<i>Mentha cardiaca</i>	J. Gerard ex Baker	カルディアカ
<i>Mentha cervina</i>	L.	ケルウイナ Hart's pennyroyal mint
<i>Mentha cunninghamii</i>	(Benth.) Benth.	クニンガミイ
<i>Mentha dahurica</i>	Fisch. ex Benth.	ダフリカ ダフリアンタイム(ダフリアハッカ)
<i>Mentha darvasica</i>	Boriss.	ダルウアシカ
<i>Mentha diemenica</i>	Spreng.	ディエメニカ slender mint
<i>Mentha gattefossei</i>	Maire	ガッテフォッセイ
<i>Mentha grandiflora</i>	Benth.	グランディフローラ
<i>Mentha japonica</i>	(Miq.) Makino	ヤボニカ ヒメハッカ(姫薄荷)
<i>Mentha laxiflora</i>	Benth.	ラキシフローラ forest mint
<i>Mentha longifolia</i>	(L.) L.	ロンギフォリア ホースミント、ナガバハッカ(長葉薄荷)、ケハッカ(毛薄荷)、horse mint (亜種) <i>M. longifolia</i> subsp. <i>capensis</i> (Thunb.) Briq. [African wild mint], <i>M. longifolia</i> subsp. <i>noeana</i> (Briq.) Briq., <i>M. longifolia</i> subsp. <i>polyadena</i> (Briq.) Briq., <i>M. longifolia</i> subsp. <i>typhoides</i> (Briq.) Harley, <i>M. longifolia</i> subsp. <i>wissii</i> (Lauert) Codd (変種) <i>M. longifolia</i> var. <i>amphilema</i> Briq. ex Rech.f., <i>M. longifolia</i> var. <i>asiatica</i> (Boriss.)Rech.f. [Gray mint], <i>M. longifolia</i> var. <i>kotschyana</i> (Boiss.)Briq., <i>M. longifolia</i> var. <i>petiolata</i> Boiss., <i>M. longifolia</i> var. <i>schimperii</i> (Briq.)Briq.
<i>Mentha micrantha</i>	(Fisch. ex Benth.)	Heinr.Braun ミクランタ
<i>Mentha nemorosa</i>	Willd.	ネモローサ イエルバブエナ、モヒートミント、mojito mint, large apple mint, yerba buena in Cuba, foxtail mint, hairy mint, Cuban mint,
<i>Mentha pamiroalaica</i>	Boriss.	パミロアライカ
<i>Mentha pulegium</i>	L.	プレギウム ペニーロイヤルミント、メグサハッカ(目草薄荷)、pennyroyal mint, creeping pennyroyal mint, European pennyroyal mint, flea mint, lurk-in-the-ditch, organ broth, organs, organ tea, piliolerian, pudding grass, run-by-the-ground, ‘アップライトペニーロイヤルミント’('Upright Pennyroyal Mint')、‘カニンガムミント’('Cunningham Mint')、‘Nana’,
<i>Mentha requienii</i>	Benth.	レクイエニイ コルシカミント、Corsican mint
<i>Mentha royleana</i>	Wall. ex Benth.	ロイレアナ ロイルズミント、Royle's mint (変種) <i>M. royleana</i> var. <i>afghanica</i> (Murata) Rech.f., <i>M. royleana</i> var. <i>detonsa</i> (Briq.) Rech.f.
<i>Mentha saturoioides</i>	R.Br.	サトゥレイオイデス ネイティブペニーロイヤルミント、native pennyroyal mint
<i>Mentha spicata</i>	L.	スピカータ スペアミント、ミドリハッカ(緑薄荷)、オランダハッカ(和蘭薄荷)、common spearmint, garden mint, English mint, silver mint, mackerel mint, native spearmint, our lady's mint, spire mint, sage of Bethlehem, fish mint, lamb mint, German spearmint, [品種] ‘カーリーミント(カールドミント、カールドスペアミント、チリメンハッカ(縮緬薄荷))’('Curly', 'Curled Mint')、‘ケンタッキーカーネルミント’('Kentucky Colonel')、‘モロッコミント’('Moroccan Mint')、‘Himalayan Silver’、‘Julep’ (亜種) <i>M. spicata</i> subsp. <i>condensata</i> (Briq.) Greuter & Burdet
<i>Mentha suaveolens</i>	Ehrh.	スアウエオレンス アップルミント、マルバハッカ(丸葉薄荷)、apple mint, round-leaved mint, Egyptian mint, woolly mint, [品種] ‘パインアップルミント’('Variegata') (亜種) <i>M. suaveolens</i> subsp. <i>timija</i> (Coss. ex Briq.) Harley
<i>Mentha × carinthiaca</i>	Host	カリンティアーカ (<i>M. arvensis</i> L. と <i>M. suaveolens</i> Ehrh. の交雑種)
<i>Mentha × dalmatica</i>	Tausch	ダルマディカ (<i>M. arvensis</i> L. と <i>M. longifolia</i> (L.)L. の交雑種)
<i>Mentha × dumetorum</i>	Schult.	ドウメトルム (<i>M. aquatica</i> L. と <i>M. longifolia</i> (L.)L. の交雑種)
<i>Mentha × gayeri</i>	Trautm.	ガイエリ (<i>M. longifolia</i> (L.)L. と <i>M. spicata</i> L. と <i>M. suaveolens</i> Ehrh. の交雑種)
<i>Mentha × gentilis</i>	L.	ゲンティリス ジンジャーミント、スコッチミント、Scotch spearmint, golden apple mint, red mint, bushy mint (<i>M. spicata</i> L. と <i>M. arvensis</i> L. の交雑種) [品種] ‘斑入りジンジャーミント’('Variegated Ginger Mint')
<i>Mentha × kuemmerlei</i>	Trautm.	クエムメルレイ (<i>M. aquatica</i> L. と <i>M. spicata</i> L. と <i>M. suaveolens</i> Ehrh. の交雑種)
<i>Mentha × locyana</i>	Borbás	ロキアーナ (<i>M. longifolia</i> (L.)L. と <i>M. × verticillata</i> L. の交雑種)
<i>Mentha × maximiliana</i>	F.W.Schultz	マキシミアネア (<i>M. aquatica</i> L. と <i>M. suaveolens</i> Ehrh. の交雑種)
<i>Mentha × piperita</i>	L.	ペペリタ ペパーミント、セイウハッカ(西洋薄荷)、brandy mint, lamb mint (<i>M. aquatica</i> L. と <i>M. spicata</i> L. の交雑種)、 [品種] ‘オーデコロンミント’('Eau de Cologne')、‘チョコレートミント’、‘キャンディミント’、‘ミツチャムミント’、‘トッドミツチャムミント’('Todd-Mitcham')、‘オレンジミント(ベルガモットミント)’、‘グレープフルーツミント’、‘レモンミント’、‘ライムミント’、‘ラベンダーミント’、‘カールドペパーミント(カーリーペパーミント)’、‘Variegated Peppermint’、‘Blue Balsam’、‘Black Mitcham’、‘Clackamas’、‘McKenzie’、‘Swiss’
<i>Mentha × pyramidalis</i>	Ten.	ピラミダリス (<i>M. aquatica</i> L. と <i>M. spicata</i> subsp. <i>condensata</i> (Briq.) Greuter & Burdet の交雑種)
<i>Mentha × rotundifolia</i>	(L.) Huds.	ロウンディフォリア false apple mint, Egyptian mint (<i>M. longifolia</i> (L.)L. と <i>M. suaveolens</i> Ehrh. の交雑種)
<i>Mentha × smithiana</i>	R.A.Graham	スミティアーナ red rapipila mint (<i>M. aquatica</i> L. と <i>M. arvensis</i> L.、 <i>M. spicata</i> L. の交雑種)
<i>Mentha × verticillata</i>	L.	ウェルティギルラータ whorled mint (<i>M. aquatica</i> L. と <i>M. arvensis</i> L. の交雑種)
<i>Mentha × villosa</i>	Huds.	ウィルローサ ボールズミント(Bowles' mint), small leaved mint, regular mint, creeping mint, mint-leaf-girl, mint-in-pod, mojito mint, apple mint, woolly mint, hairy mint] (<i>M. spicata</i> L. と <i>M. suaveolens</i> Ehrh. の交雑種)
<i>Mentha × villosa-nervata</i>	Opiz	ウィルローサネルワータ sharp-toothed mint (<i>M. longifolia</i> (L.)L. と <i>M. spicata</i> L. の交雑種)

表2. 全国ハーブサミットの開催地とテーマ

回	年	開催地	テーマ
第1回	1992	山梨県河口湖町	ハーブ事業の今後の発展をもとめて
第2回	1993	香川県内海町	ハーブの発信は私達の町から
第3回	1994	長野県池田町	ハーブによるまちおこしを目指して
第4回	1995	島根県石見町	豊かな生活空間の創造を目指して
第5回	1996	千葉県酒々井町	ハーブによる新生活創造への提言
第6回	1997	北海道豊富良野町	ハーブによるさまざまな角度から町づくりを目指して
第7回	1998	兵庫県一宮町	みんなで進める香りの町
第8回	1999	大分県野津原町	香りの文化で心豊かに
第9回	2000	福島県猪苗代町・棚倉町・三春町	伝えよう、ハーブで健康、うつくしま
第10回	2001	神奈川県横須賀市	夢・人・まち・・・香りの扉が今ひらく
第11回	2002	沖縄県那覇市	ヘルシーリゾート癒しの島
第12回	2003	石川県珠洲市	ゆめ半島 ハーブの風
第13回	2004	秋田県西目町	ハーブが香る全町公園の町 西目
第14回	2005	兵庫県神戸市	神戸で見つけてください、香りのあるぐらし
第15回	2006	北海道北見市	ハーブの物語(おはなし)しませんか。
第16回	2007	千葉県南房総市	花(ハーブ)と出逢える香りのまち 南房総
第17回	2008	香川県小豆島町	オリーブライフ小豆島〜オリーブできれいなになれる心とからだ〜
第18回	2009	大分県別府市	ONSENが育む「香り」と「癒し」
第19回	2010	兵庫県小野市	ハーブでエコな暮らし、食と健康
第20回	2012	山梨県富士河口湖町	共同宣言「ハーブで活力ある町づくりに取り組んでいく」
第21回	2013	沖縄県南城市	ハーブの薫る癒しの空間 なんじょう
第22回	2015	沖縄県石垣市	命草NUCHIGUSA
第23回	2016	愛媛県久万高原町	森のハーバルライフ

になりつつあります。今年の石垣市大会では農政課が中心となって開催され、海藻を含め、八重山地域で昔から伝統的に利用され、命を育み、つないできた植物を「命草（ぬちぐさ）」と命名し、ピーチ（ヒハツモドキ）をはじめとする伝統ハーブの6次産業化、経済活性、産業振興に大きな役割を果たしました。

サミットは数日のイベントではなく、計画段階から市民が参画し、一年をかけて、ハーブに対する学校での普及・教育や、市民向けの料理・クラフトなどのワークショップ、新商品や加工品の開発、販路の開拓、オープンガーデンや公園の整備など、さまざまな活動が展開され、地域の活性化と産業の市民理解に大きく貢献しています。

このように、全国ハーブサミットは、ハーブによる地域振興を目的としています。ハーブとは、単に1980年代のハーブブームで渡来した西洋ハーブだけを指すのではなく、ネギやショウガ、ミツバなどの野菜や、カンキツ類などの果樹、ヒノキやクロモジなどの樹木、チャ、ソバ、ベニバナ、ウコンなどの特用作物、トウキやミシマサイコなどの薬用植物など、様々なものを含みます。全国ハーブサミットが、ハーブというこれまでとは違った新しい切り口で、地域の特産農作物を見直

す大きなきっかけになることを願っています。

文献

- Bentham, G., 1848. *Mentha*. In: *Prodromus systematis naturalis regni vegetabilis*, DeCandolle, A., Ed., v.12. pp.164-177, 698. Victoris Masson, Paris.
- ジャパンハーブソサエティー学術委員会. 2015. ミントの植物学と栽培、人との関わりの歴史. *The Herbs*. 280.5-10.
- 木村正典. 2013. ハーブの植物学. p.94. ジャパンハーブソサエティー編. ハーブの教科書. 草土出版. 東京.
- 木村正典. 2015. ミント類の精油成分と分類のすべて. *The Herbs*. 280.28-31.
- 坂出豊海. 2008. 全国ハーブサミット連絡協議会. ジャパンハーブソサエティー25周年記念誌. ジャパンハーブソサエティー. 東京.
- 上海科学技術出版社, 小学館編. 1985. ハッカ. p.2138-2140. 中薬大辞典. 小学館. 東京.
- Tucker, O. and Naczi, R.F.C., 2007. *Mentha*: an overview of its classification and relationships. In: *Mint: the genus Mentha*, Lawrence, B.M., Ed., 1-39. CRC Press. Boca Raton.
- 梅本和泰. 2000. ハッカ属植物の自殖株の精油成分. 晃洋書房. 京都.
- The Plant List : <http://www.theplantlist.org/>